文政七年甲申

金毘羅歌舞伎

全六冊

初編

遺3
1819

金毘羅船利生纜

初編

13遠へ
門
1819

馬琴著

金毘羅船

甲申初春発兌

英泉画

金毘羅船利生記

文政七年甲申春正月新版

曲亭馬琴述

虚誕ハ異名さまぐゝあり浮圖家の方便壮氏の寓言武士の武畧ハ遊女の手管扨富賈の空拵言丈孰か虚誕ハあらざりける虚ハ是實の對ハ花ハ咲て実ハまことゝ邪説暴行ちきものを善巧といひ戯謔といひ神道真實佛語ハ口々神釋両部の乗合なる金毘羅船と題し〳〵る標識ハ讃州象頭山界の先なる智恵の海面梶取揖仕せうと作者ハ獲ハ帆を揚て思ひつく名を友紙筆ハ漕む今昔和漢ハ渉るも少許類抜彼天潢の何侯王の西遊記より故事附とゝ物ハ草稿のかゝ代のむ〳〵佛在世あられもるゝ負ハ經まゝ戯作も勸懲まゝ上ら生さうそぶやとゝ神も照覽佛ハうんどなゝ身まゝ世まゝとゝ追く接木の花の春裏をゝく鶴の脛なる長物語の今茲初編の序ひきゝ羽織の續く弥其紙までゝ考果〳〵きものゝ千世ハ千世ハ向かゝ敬く序ス

疑ひなく差わたるとき
ことを信という
信の至て
深きなり
ことを深信と
いふ深信解
なるなり
禍を轉じて福となすなり
されバその願ひ成就
せずといふことなし吁深信の
徳偉なるかな
金毘羅毎歳詣の
行者
金野伍平太
長堀橋の
船宿金ひら野屋
むすめ
女児
阿
抱

賛曰
あくろ直き
獣なり
山の
名ち
家の
頭に
神
宿る
金毘羅
毎歳詣の行者
御神酒講十郎

千早振る神世のむかし
火神軻遇突智の
生れしときに
母の尊
伊弉冊ハ
焼まとく
神去給ひし
ゑ伊弉
諸尊
怒給ひて
軻遇突智を真研ぬ

天地開闢
夫婦權輿
陽尊神

今火を鑽く薪に殺し又婦女
子の月經と火ぐろ
しとのふとも
その縁故なり
賛曰
吾妹みが
胆の
火とぞ
かくや
軻遇突智の母

陰尊神

火神
軻遇突智

火の神軻遇突智の破ると
ころ凝血へ石となる
その石の中ゆりいく
一箇の神化生あり
とまを石拆の神といふ佛經ふ
いふ金毘羅天王又金毘羅
天童子本地不動と
いふものいとの神ふとく

東方陽徳の母神

神通不測
あめのいはさくの
天石拆神

似ようは其
然らんか
賛曰
百億の般若
石の隙
生出く
動きなる
世を
まもりて
そなへ

西方陰徳の師表

小角は役行者と申す大和葛城郡茅原村の人なり。三十二歳の春葛城山ふもとのうつ松子と食とし藤葛を衣ともとし孔雀明王の呪文を持し飛行自在なり。一日山神をつかし金峯山ふ石橋を造らんとすれども其の速やかざるを怒り一言主の神を呪縛す。又常ふ小角ふ使役る二童鬼あり。そゝ中ふ前童鬼は男ゝ妙童鬼ハ女なり。

後鬼の変相
山妻高峯

又これらを前鬼後鬼とも人。この鬼ハ大和の生駒嶽ふ住り。後ふ小角ハ捕れて大峯ふ置る。その跡ふ精舎を建て鬼取寺と名付くその基盤小角はその名人世の人ハ役行者と唱ふ天性至孝なれば その母を鉢ふ載せ後啓せしの仏法ふ帰依して本邦の大神仙後世温を賜ひて神変大菩薩と稱せらる。賛曰

葛城やそる間の山を踏分て
入りゆく君がむかしの名ぞ

前鬼の変相
樵夫陀羅女

大坂長堀橋
金毘羅船
雑船
船宿の図

提婆安達ヨメ大盤石を投下して釋尊を殺せしとき
金毘羅天童子
石を受留る圖
義定石橋山の下ゆく伊野五郎
景久が撥つ

金世四季舟初編
馬琴作
筆畊
千形仲道
英泉画

曲高鶴琴作

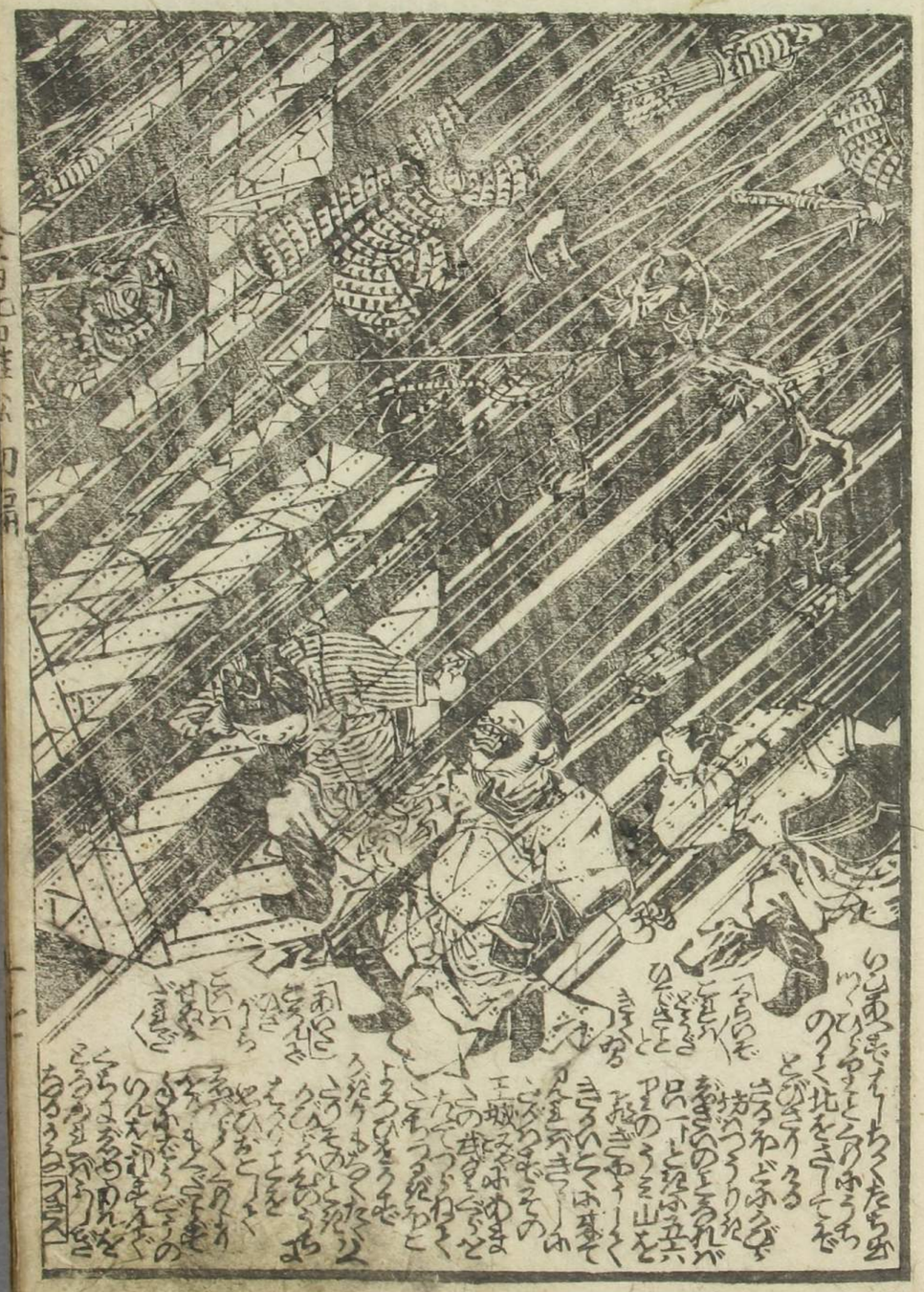
[illegible]

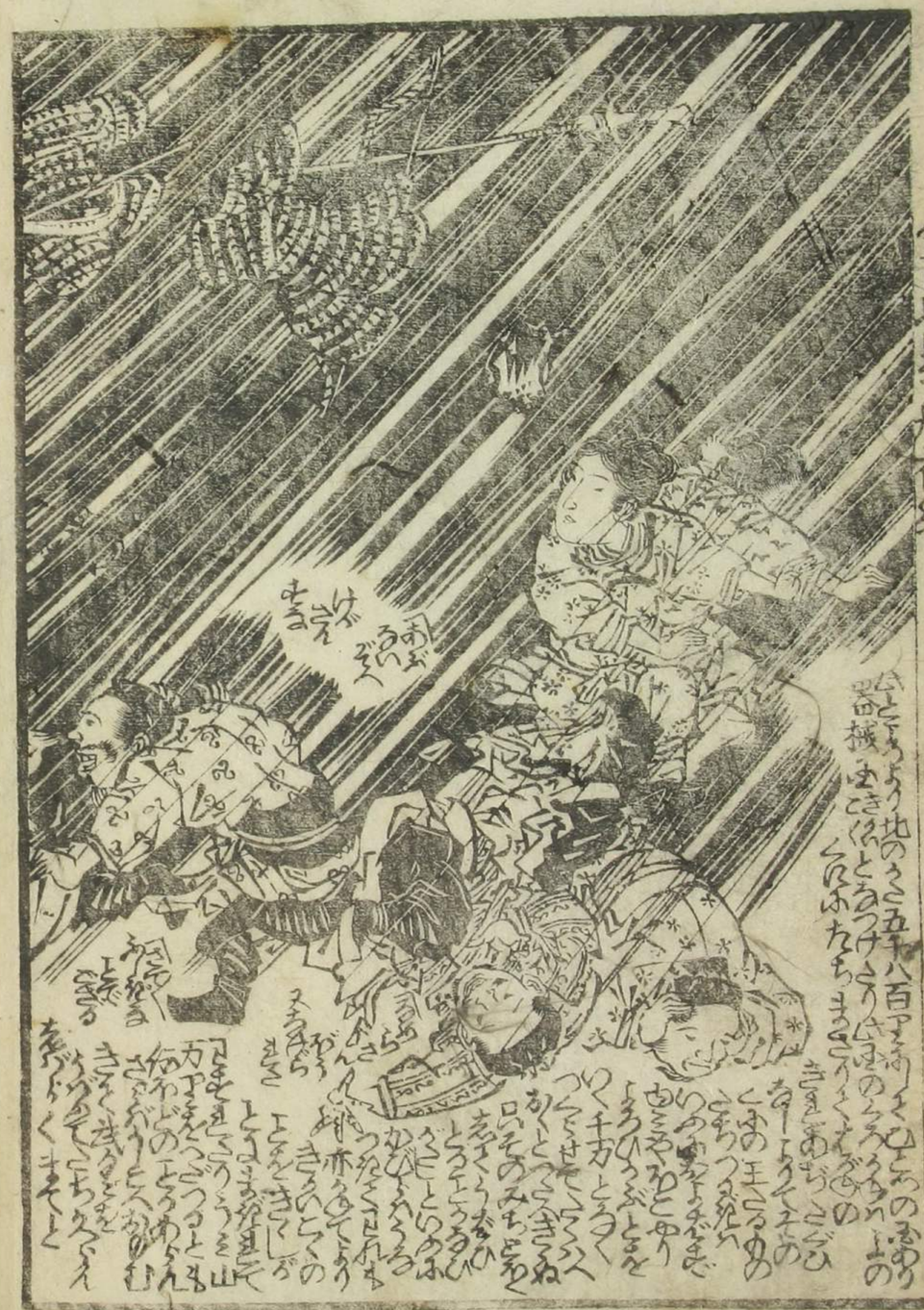
金毘羅船初編下

世話 金壽五郎作
人 御神酒徳平郎
英 画

神釋性淡両部の教向の狂言綺語とまうせども
思ひつる他の名所方便の海の帆を揚げ飛者画ゴヾ
ゑゝ金ふ花ゑとの多の極元ゑとゞろ多の義ゝ金船を行る中変
わる利生の徳二編三編遅滞なく毎年発兵淡路の
出方ハ三年ゝとゝ出版判淡路ゝ復生第四上上

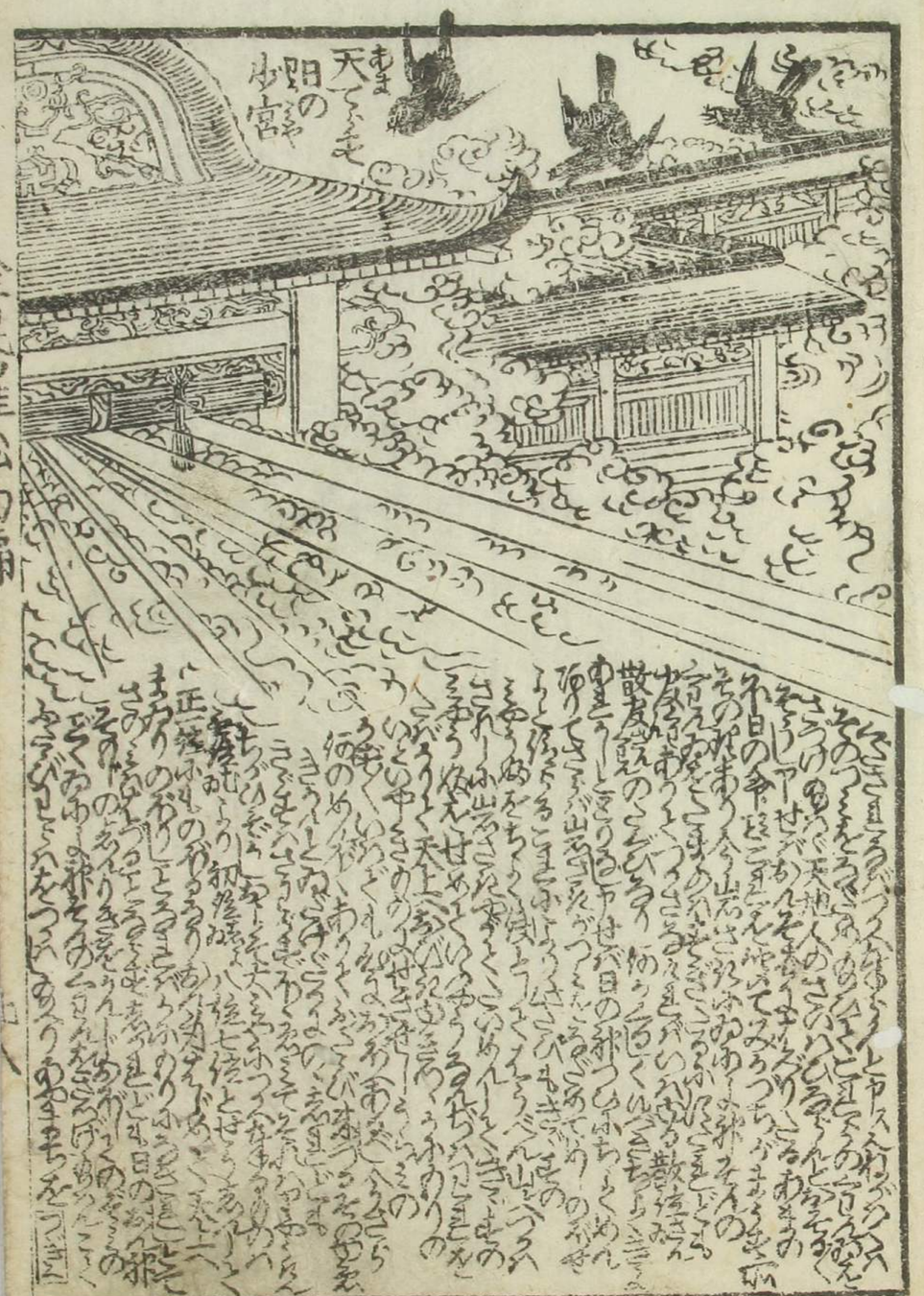
板元 芝神明前 和泉屋市兵衛梓





黒貝媛神
蛤貝媛神
い
ち
ろ
は

岩
ほ
へ
と


天照大神の宮殿

馬琴作

芙蓉千形仲道

家傳神女湯 [illegible] 百代百銅

精製奇應丸 大包代二朱 中包代五朱 小包代壱朱

真夫能黒丸子 一包代五朱

婦人つゞむの妙薬 一包代壱朱

製薬元祖富士参詣名高滝沢氏

取次所 大坂心斎橋筋 江戸芝神明前

溪齋英泉画

古賀氏